シリーズ『障がい福祉』⑫

農福連携（のうふくれんけい）っち、知っちょる？　－農業と福祉がつながる－

●お問い合わせ　健康福祉課　☎76－3821

人口減少や過疎化が進むいま、多様な人材活用が求められています。高齢化や担い手不足に悩む「農業」と、社会参加や働く場を確保したい「福祉」がつながり、それぞれの課題を一緒に解決していく取組を「農福連携」といいます。

全国各地でこうした取組が広がっており、障がいのある方々が農業や林業の現場で活躍しています。九重町でも昨年から農福連携の取組を開始し、現在は大分県社会福祉事業団が運営する障がい福祉サービス（就労訓練事業）の一つとして、東飯田地区にあるビニールハウスを農家さんからお借りし、農家さんから直接指導を受けながらピーマンの栽培・ＪＡへの出荷を行っています。他にもブルーベリー農園の収穫・出荷作業を担うなど、地域と密接に関わり合いながら障がいのある方の働く喜びと自立に向けて農福連携の取組を進めています。

ふるさとの文化財探訪　第90回

ひとやきば（火葬場）

文化財調査員　後藤浩二

幼い頃、こんな夢を見ました。

集落の終わりに小道があり、山に続いています。幼い私はその先に入った事が無かったのですが、夢の中の私は踏み込んでいました。

やがて大きな滝があり、所々赤い、さびた様な匂いのする河原が広がりました。そして白い服を着、髭をたくわえた老人が「こっちに来るな！」と怒鳴っています。

私は恐怖で、目を覚ましました。

それから数十年後、友人から、そこは昔、ひとやきばだったと知らされます。

ひとやきばとは、今の火葬場のことです。

火葬場は昭和27年くらいまで、使われていたそうです。

今はもう草木が生え、当時の様子をうかがう事は出来ません。

古老の話では、整備された道の下に石が敷き詰められており、その上で人が焼かれたそうです。

地区クラブには棺桶をはじめ、葬儀の道具が用意されていました。

不幸があると、その都度手直しして、近隣地域で利用していたそうです。

葬儀の時は、玄関に竹を組んだ門を作り、忌の紙をはります。

座では祭壇を組み篠竹に紙で作った菊をつけ、それに灯籠を下げ、横にたいまつと蝋燭を立て、これを数本用意し、葬儀を迎えたそうです。

そして、たいまつを持ち、灯籠を下げ、火葬場までの道を進みました。

葬儀がビジネスになり、形態が大きく変わった昨今ですが、今に残る〝こうじゅ〟のシステムが、当時いかに大切な役目を果たしていたか、考えさせられます。

その火葬場に向かう道に地蔵さまと呼ばれる古い石造物があります。見たところ六地蔵の様ですが、劣化が進んでおり、銘などは確認できません。

六地蔵は、六道輪廻（地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人道、天道）を守護する地蔵尊で、葬儀場や墓地など他界への旅立ちの場に建てられる事が多くあります。最後のお別れの道のりに、冥福を祈って建てられたのでは、ないでしょうか。

又、この地蔵尊は、地元のものから「歯が痛いとき、大豆をお供えして祈願をすると、ご利益がある」と伝えられており、さらなる調査を続けたいと思います。

地蔵さま